

符 39

943

繪本廿四孝全



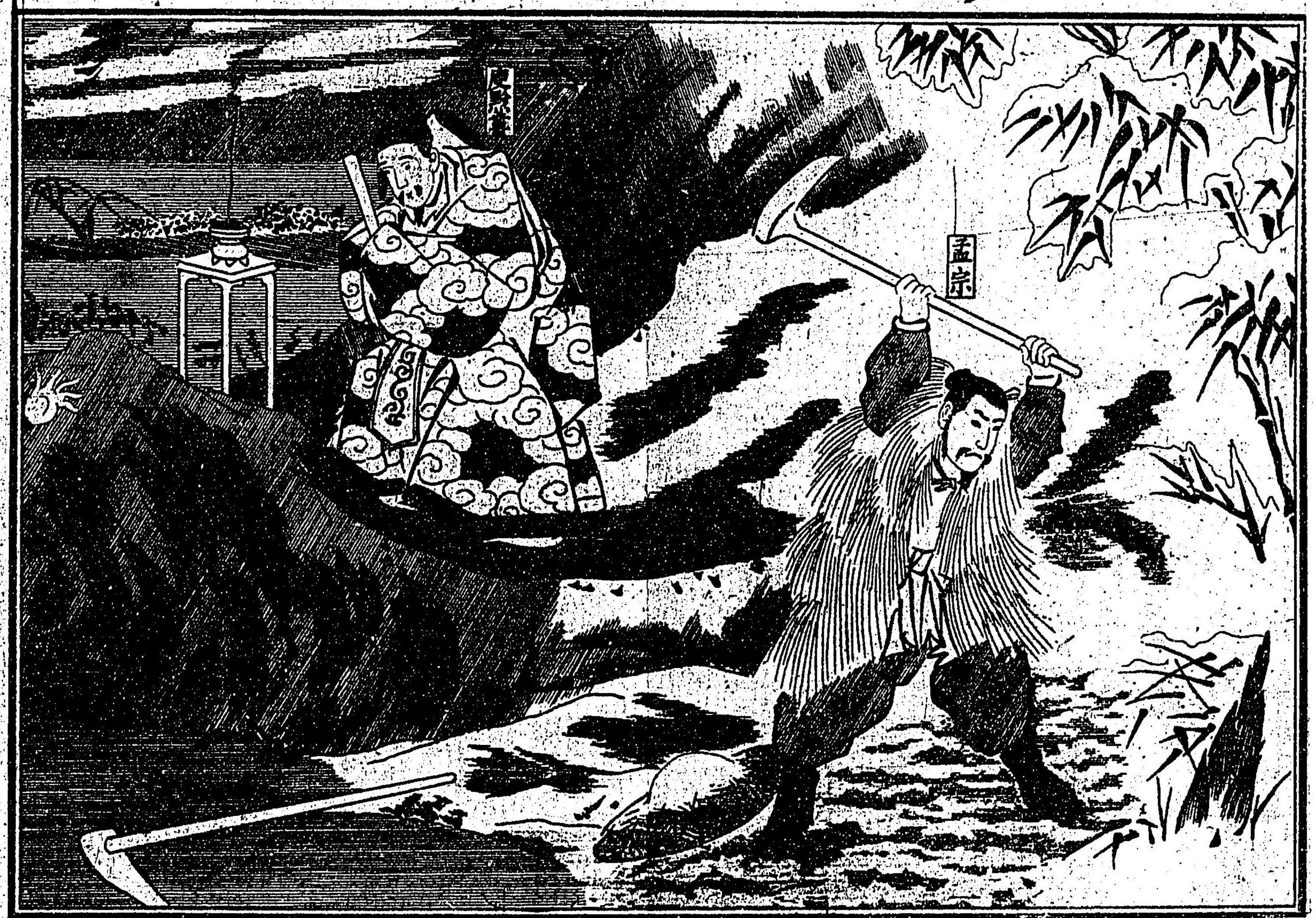
金壽堂版  
國政筆







孝者 百行之基











漢文帝親嘗藥  
漢の高祖中  
まゝく不幸の  
病を給ひ御母  
薄衣を穿行  
病を給ひ御母  
晝夜位冠を解き給ひ  
朝夕の食を給ひ  
至る迄自ら嘗み試み御母  
を養ひ給ひ天子の曹を  
御身までかくさせ  
給ふべしと難有御孝  
心成るべし



曾參嘗指滯心  
早に孔子の弟子  
して大孝行の入あり  
故に孔子此の孝終を授け  
臨んで或時曾しん山行を耕を取行  
まゝりし跡母の親き来り母もて  
思ひ心任に曹人早や返りし  
指をかみたる山中の曹人痛心を言  
急ぎ上り曹子其改を語り母孝子親を言  
たるの誠と感し給ひ責を孝子に言可し





関根 関根 衣須 子 哲人 行成人 母 子 子 子

仲由ハ夫を悦せず古貧窮にして父母を 養へたる事をしたひて常に歎き悲みぞ實は 孝心感ず可



仲由ハ夫を悦せず古貧窮にして父母を 養へたる事をしたひて常に歎き悲みぞ實は 孝心感ず可

二一トヨキ





董永賣身葬父  
 董永後漢の人あり早く母を失  
 ひ父は使はる孝心也父死し葬へき便  
 あり日比雇はる主人の元に至り  
 錢十ノ文を借て長く其家の下僕たりん  
 ても錢を得て父を葬り其家は至とする時道まで美しき女は  
 逢ひ強て永ら妻と成り一月の間は三百日のさぬをかり其

眞目を懐いて我々天帝  
 の織女あり天帝君  
 が孝を感て我を  
 懐きて  
 来て去  
 りて



列子鹿乳奉親  
 列子其生時代を詳せず相傳  
 孝行の各を称せり父母年寄  
 め目煩るるに医者を乞はれ  
 鹿の乳を用て癒難と言然  
 鹿を殺して鹿乳を成せり  
 冠て山中に行き鹿は父を乳を成めんとす  
 獵人來て射取らんとす  
 列子驚て声を揚て其實を  
 告げたりはれ可  
 矢を伏て通り  
 係るを業あんと情  
 心を感し見そあ  
 必死の鎗を免し成る可



二十四孝



江革行催供母  
後漢の人也母の乱母を供他國に行き其身素  
足赤舄人子雇て母を養へる其  
其後母治て故郷へ歸る時母を車  
に乗せ午馬又驚き給へん  
自ら是を抱き歸り世に  
孝經を孝と稱し朝廷  
は開て高官を  
授けん行  
末日出度  
榮へり



陸績  
懐橋遺母  
三國の時  
の人也六絲の  
方を行けるを御  
馳走を橋を出し陸  
績密に三ツを懐に入歸る時弊  
をうめ地を落たり衰術甚卑陋  
の由告ける陸績畏て吾が爲に出  
給珍果を無毛食行をしみ持歸り  
母子與へるるり答  
満座感しけり

二十四孝













楊香楹  
虎救父  
楊香楹  
の國を  
賣る娘也  
幼少時  
孝心深  
父を使  
不離父  
山を行  
大なる  
出交を  
虎早  
取付  
虎早

一日



老萊子  
戲綵娛  
親  
幼少時  
行を盡  
其身七十  
餘り父母  
也吾老衰  
母の前  
を悲し  
様は遊  
年の寄  
子供  
慰けり









後漢の人あり父は使  
至孝あり其妻室  
氏も又姑も孝行  
盡しなむ然るは母井の水を  
水無き依り日々龍は遠より江  
母は進め或時美子家の側は清き泉涌江の  
水は異あらば又此れも毎朝二足の鯉出し  
助けたりとぞ



王哀聞雷は泣き  
王哀母の使々  
行あり常に其心  
子肖らば其母雷  
恐て甚し左れハ  
雷の催有は壁  
へ遠方は有ても  
馳付て母の心を  
慰さめたる  
死して後心

雷の鳴る  
毎は其母  
行き母人  
恐れ給い  
小王哀  
爰は  
有は其  
近を立  
去ぬとぞ



老萊子  
 戲綵娛親  
 幼時より  
 孝行を盡す  
 其身七十は  
 餘りなくと父  
 母尚存命あり  
 しかば我老を父  
 の前へ頭てハ  
 其身の老を悲し思ひ能  
 ば子供の様ある衣服を着て  
 様は遊ひ物探取出し戲遊て敢  
 て年の寄たる躰を見せ有時倒れ  
 子供の泣たるまゝを以て父母の心を慰むなり



明治十八年十二月三日御届

東京法政堂  
 編輯出版人  
 救金之助

救金之助



